

## 学位論文題名

## 幼児の遊びにおける意味の生成と遊び世界の構成

## － 出来事、行為、モノ、空間の関係から －

## 学位論文内容の要旨

本論文は、人間がモノと空間との関わりの中で意味世界を形成していくことを主に幼児の協同的遊びの生成過程の分析を通して明らかにしたものである。幼児は彼らの遊び世界をモノと身体的に関わる中でモノを意味的に捉え、仲間と意味を共有していくことで創り上げている。そして彼らのモノと行為的に関わる世界を支えているのはモノと行為を取り囲んでいる意味空間である。あるいは逆にこの空間はモノと関わる幼児の行為を通して意味世界として立ち上がっている。このような行為、モノ、空間は相互に関連を持ちながら遊びという一つのストーリーを生み出している。この様々な要因が相互関連しながら時間的に持続しながらコトとして起きていることを捉える視点として「出来事」という分析枠組みを採用する。「出来事」はいわば意味生成の単位であり、ホワイトヘッドが指摘しているように、「出来事」が人間にとって意味を持った時間と空間を内包している現実的な生の単位になっており、空間と時間、そしてモノを統合する視点を与えてくれる概念である。

このように本論文では、幼児の遊びの世界を出来事として意味づけられたモノと空間を構成していく行為の連続として捉えていく視点に立って幼児の遊びの世界の生成過程をいくつかの観察と分析から明らかにした。本論文は、序章と終章を含めて全部で8つの章で構成されている。

第1章では、本論文で幼児の遊びの世界を行為、モノ、空間と、それらの相互関連として捉えていくための理論的枠組みの検討を行っている。行為についてはモノとの身体的関わりを提示したメルロ＝ポンティの理論、空間を意味空間として捉える視点としては多木浩二、ボルノウ、バシュラールなどの理論に注目して、人間の意味生成はモノとそれが置かれている空間との関わりの中で行われていることを提示した。

第2章では、幼児の遊びに関する研究として出された先行研究の批判的検討と、新しい研究課題の提示を行っている。従来の幼児の遊び研究では、内的表象としてのイメージや見立ての能力の獲得によって遊びの成立とその発達を説明することに主眼が置かれてきた。その代表的なものがピアジェの発達理論であり、彼の遊び論であった。これに対して、ヴィゴツキーは遊びをモノとの行為的関わりを通してモノを意味化していく活動を重視した独自の遊び論を提出している。本論文の遊び論も基本的にはヴィゴツキーの遊びの理論に依拠しているが、これまでの幼児の遊びに関する研究では、モノへの身体的関わり、空間、遊びの動機、さらにはこれらがシステムの的に関連するものとして捉える視点が欠如していることを指摘した。そして、ヴィゴツキーの遊び論でも言及されることがないモノと空間配置から生まれる意味空間が幼児の遊びの活動と有機的に関連しながら存在していることを論じた。

第3章では、ワロンとメルロ＝ポンティの対人関係の成立の起源を他者との身体運動的関わりに求める論を参考にしながら、協同的遊びが開始されるための条件分析を1、2歳児の遊びの継続的観察によって明らかにした。この章では、協同的遊びが成立するための条件である遊びの意味の共有は、身体運動的行為の相互交流にその起源があること、さらに

は運動的模倣の一つであるワロンの言う「運動的投影」に注目しながら、発達初期の幼児が他者への身体運動的行為と他者からの反応を通してシンボリックの意味を獲得していく過程を明らかにした。これまでの幼児の遊び研究では、意味表象とその共有化については指摘されていながらも、シンボル表象やその使用がどのような形で生まれ、また他者との間で共有化されていくのかを問うことはなかった。これに対して、第3章では他者との身体運動的関わりと身体運動的な意味の了解から次第にシンボリックの意味を獲得し、共有していくという身体運動と表象の連続性を示し、これまで十分に検討されてこなかった遊びの原初の中で起きていることを示した。

第4章では、4、5歳児の協同的遊びの成立過程を長期的な参与観察と詳細な相互作用分析から解いたが、ここではモノを使った遊び空間の構成に注目して、行為、モノ、空間との間の相互規定的関係から遊びというストーリーが生成されていくことを明らかにした。子どもはモノと行為的に関わることでモノを意味づけていく。そしてこのモノが置かれている空間を構成しながらモノと空間を一体にしながらか一つの意味空間を生成している。この意味空間はまた子どもたちの協同的遊びの活動を方向づけてもいく。これが遊びの持続を生み出し、遊びのストーリーとなっていく。モノ、行為、空間は遊びとして時間的に連続な出来事を創り出しており、それは意味の生成でもある。遊びの世界は小さな出来事の生成という短い時間単位とそれらの連続という長い時間単位とが入れ子式に構成されていることを論じた。

第5章では、第4章で取り上げた室内遊びとは対比的な屋外というオープン・フィールドにおける遊びの構成過程とその特徴を論じた。ここでは室内遊びと比べて屋外という独自の空間構成と、モノとの関わり方が比較的自由に行われていることから遊びの展開が偶発的に行われることが多いことを明らかにした。オープン・フィールドは空間の意味的規定性が弱いためにそこでの行動と意味生成の自由度が大きくなっていること、そのために、屋外遊びでは子どもたち自身が遊びのテーマとして活動を展開していく具体性と遊びの意図を明確に持つことが一層必要になっている。この第4章と第5章の二つの遊びを比較することで、意味空間を構成しながら遊びが時間的に持続しながら一つのテーマとして構成していくという共通性と、フィールドの特性による遊び展開の仕方とモノの使い方の相違が明らかになった。その意味では、遊びは複数の要因が力動的に関連し合っているシステムの連関の世界であると指摘することが出来る。

第6章では、幼児の日常生活を題材にした描画を時間表現の問題として論じ、ここから出来事という意味世界は時間イメージとして構成されていることをドゥルーズの時間論を援用しながら論じた。時間と空間についてはこれまでも長い間論争されている重要な問題の一つであり、また本論文でも幼児の遊びの生成を空間構成という視点から論じており、空間と時間とをどのように考えていくべきかという問題は本論文でも避けて通ることが出来ない問題でもある。ここでは、時間と空間を統合して論じていく視点として出来事という枠組みで捉えることで、空間を時間の中に取り組みることが可能になっていくことを論じた。そして、実際に幼児が日常の生活で経験したことを描画として表現したものには、空間を出来事として再構成し、またその出来事を時間的経過として表していることが見出された。そして最終的にはこの出来事というものは行為者の意味世界のことであるというドゥルーズの理論を使うことで、本論文で問題にしてきた幼児の遊びの世界を出来事として扱う理論的可能性を論じた。

最終章は、本論文のまとめと結論である。ここでは幼児の遊びの生成過程に存在する身体的表現行為や遊びの構造は諸変数のシステムの連関であることを論じた。

# 学位論文審査の要旨

主 査 特任教授 佐藤 公 治  
副 査 教 授 神 谷 栄 司 (京都橘大学人間発達学部)  
副 査 准教授 川 田 学  
副 査 助 教 石 岡 丈 昇

## 学位論文題名

### 幼児の遊びにおける意味の生成と遊び世界の構成 — 出来事、行為、モノ、空間の関係から —

本論文は、人間がモノと空間との関わりの中で意味世界を形成していくことを主に幼児の協同的遊びの生成過程の分析から明らかにしたものである。人間精神とその発達について、これまでの発達研究ではもっぱら対象世界を心的な表象とその発達変化に注目して論じられることが多かった。その代表的な発達理論としてピアジェの認識発達の理論がある。そして、ピアジェを含めて発達研究の多くは、対象的意識の形成を外部世界と身体運動を通して直接関わっていることを十分に考慮することなく内的表象として論じてきた。これに対してヴィゴツキーは、人間精神は外部世界にあるモノや文化的諸変数、それらの歴史的变化と関わりながら展開し、形成されていくと定式化した。いわば人間精神とその意識世界を外対象と関わることで生成されていくという対象行為論の視点から論じている。

本論文もヴィゴツキーの精神発達の理論にもとづきながら、幼児がモノとそれらが配置されている空間と直接関わり、それらを意味的に生成しながら遊びの世界を協同的に構成していく過程を継続的な参与観察から明らかにしたものである。ヴィゴツキー自身も幼児の遊びを研究することで人間精神に含まれている基本的諸問題を解いていくことが出来るとして遊び研究の重要性を位置づけていたが、彼は遊びの意味世界の生成の過程に存在する連続性と非連続性、あるいは継続性と即興性、さらにはモノとそれらが置かれている空間と関わる中で幼児がどのように意味世界を構成しているかという問題については十分な検討をこななかった。本論文では、これらヴィゴツキーの遊び論を含めて幼児の遊びの活動をモノ、空間、そしてそれらとの関わりから生まれてくる出来事の生成と、そこに内在している意味的活動に注目しながら幼児が遊びを意味世界として形成していく中で起きていることを明らかにしようとした。

第1章では、本論文の理論的枠組みとして、人間の意味生成はモノとそれが置かれている空間との関わりの中で行われていることを多木浩二、メルロ＝ポンティ、ボルノウ、バシュラルなどの理論に注目しながら検討している。著者は、モノと空間との関わりの中

で人間が行為を展開し、意味世界を構成していく過程をホワイトヘッドの時間論を使いながら出来事として捉える理論的視点を提示し、幼児の遊びの一連の生成過程を出来事として分析する可能性を論じている。

第2章では、これまでの幼児の遊びに関する研究では、モノへの身体的関わり、空間、遊びの動機、さらにはこれらがシステムの的に連関するものとして捉える視点が欠如していたことを指摘し、遊び研究の新しい理論的視座と研究課題を明らかにしている。

第3章では、ワロンとメルロ＝ポンティの対人関係の成立の起源を他者との身体運動的関わりに求める理論を参考にしながら、協同的遊びが開始されるための条件を1、2歳児の遊びの継続的観察で明らかにしている。ここでは、協同的遊びが成立するための条件である遊びの意味の共有は、身体運動的行為の相互交流にその起源があること、さらには運動的模倣の一つであるワロンの言う「運動的投影」があることを示し、発達初期の幼児が他者への身体運動的行為と他者からの反応を通してシンボリックの意味を獲得していく過程を詳細に描いている。この章では身体運動と表象の連続性を示し、これまで十分に検討されてこなかった遊びの原初の中で起きていることを明らかにすることに成功している。

第4章では、幼児の遊びの世界がモノと空間をより精緻な形で意味づけながら安定した遊びの世界を形成していくことを4、5歳児の協同的遊びの成立過程を長期的な参与観察と詳細な相互作用分析から解いている。特にこの章では、モノを使った遊び空間の構成に注目して、行為、モノ、空間との間の相互規定的関係から遊びのストーリーが生成されていく過程を明らかにしており、これまでの遊び研究では取り上げられることがなかったモノと空間が持っている役割を具体的に示した意味は大きい。

第5章では、第4章の室内遊びとは対比的な屋外というオープン・フィールドにおける遊びの構成過程の独自性を問題にしている。ここでは室内遊びと比べて屋外という独自の空間構成と、モノとの関わり方が比較的自由に行われていることから遊びの展開が偶発的に行われることが多いことを明らかにした。オープン・フィールドは空間の意味的規定性が弱いためにそこでの行動と意味生成の自由度が大きくなっているという特徴を子どもの遊びから析出している。

第6章では、幼児の日常生活を題材にした描画を時間表現の問題として論じ、ここから出来事という意味世界は時間イメージとして構成されていることをドゥルーズの時間論を援用しながら独自の理論展開を試みている。

最終章は、本論文のまとめと結論である。ここでは幼児の遊びの生成過程に存在する身体的表現行為や遊びの構造を諸変数のシステムの連関として扱う視点を議論している。

本論文は、幼児の遊びの世界とその形成をモノと意味空間と関わりを持ちながらイメージとシンボリック的活動として展開しているものとして描き出し、これまでの発達研究や遊び研究では言及されることがなかったモノや空間が果たしている役割を実証的に明らかにしたことと、発達研究の枠を超えて現象学等の研究を使いながら新しい理論的視点を提示したことは当該分野の研究に大きく寄与するものである。

よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。